

菅原道真の太宰府時代の漢詩「敘意一百韻」の構成論考

「敘意一百韻」の重層構造についての考察 一試論

一

拙稿で筆者は谷口孝介氏の著『菅原道真の詩と学問』^(注1)の中の一文中を引用しながら以下に引く、「この「敘意一百韻」の詩句内容が重層構造になっているのではないか」という見解を提起した。

この「敘意一百韻」は、道真の意に反して僻地の太宰の地に左遷された「天涯孤独」の絶望的な状況の中で詠まれた作品である。従って、道真の心を慰めるものは、同境遇の人々の生き方に倣うしかなかったのではないか。しかもそれらの人々は道真の置かれている状況から考えて中国古典籍の中にしか求め得なかつたはずである。故にこの作品中には、多くの古人の事例が散りばめられている。この点からいえば、この「敘意一百韻」は、道真の博学多識な事を、改めて読むものに印象付ける作品ともなっている。こうした詩句の中に込められた中国古典籍の故事・逸話・事例を丹念に読み解く作業を通してこの作品の意図するものを表出させるやり方が求められる一方で、既に谷口氏の指摘されている、白居易・元稹の「東南行一百韻」「酬乐天東南行詩一百韻」両詩からの投影を念頭においた、道真の詩句内容の深層的なところの分析も求められる。そうしたものを重層させて考察した中から初めてこの「敘意一百韻」で道真の言わんとするものが見えてくるのではないかという考え方である。

〔菅原道真研究―菅家後集〕全注釈（十四）（三〇頁～三十二頁）